

ボランティア参加者にとっての地域球団ボランティアの持つ意味

1190419 上久 渉

高知工科大学経済・マネジメント学群

1. 本研究の背景・目的

高知県からJリーグ入りを目指している高知ユナイテッドSCというサッカーチームがある。全国的に見てもカテゴリーが低く、日本のトップリーグであるJ1リーグから数えると実質5部リーグにあたる四国リーグに所属しているチームである。設立して3年目で資金も少なく、ホームゲームにおける観客動員数も入場料が無料であるにもかかわらず平均440人程度しか集めることが出来ていない。しかもそのほとんどが試合前の高知ユナイテッドSCが開催しているサッカー教室に参加している小学生やその保護者である。

そのような厳しいチーム状況であるが特に印象的だったのがボランティアの存在である。試合前の会場設営やグッズ販売の準備、試合中は担架要員やボールパーソンやスコアボードの作業、試合終了後には撤収作業など数多くの作業をお金ももらわずにこなしている。高知ユナイテッドSCのような球団スタッフや資金に限られているチームではボランティアの重要性が高く、比較的負担も大きい。そのような状況であるにも関わらず積極的に様々な活動に参加しているボランティアの方々の姿が印象的かつなぜそこまでできるのか疑問に感じた。そこでボランティア参加者にとってボランティア活動とはどのような意味を持つのか調査することにした。

大沼(2017)[1]によるとボランティア活動を通じて友人・知人と有意義な時間を過ごすことが出来ても、自己の能力の提供、挑戦・成長・社会的視野の獲得など自身の成長を実感することが出来ない傾向があるとある。しかし、この傾向は冬季オリンピックや国民体育大会など規模の大きい大会での参加者を対象としているからではないかと考える。高知ユナイテッドSCのような規模の小さい球団でのボランティアならば球団とともに自身も成長でき、それを実感できるのではないかと考える。

2. 研究方法

2.1 現地調査

実際に四国リーグに所属している高知ユナイテッドSCの

ボランティアに参加し、インタビュー調査に協力してくれる人物を調査した。参加したボランティアは以下の通りである。

試合運営…会場設営・グッズ販売・ボールパーソン・担架要員

事務所作業…DM作業・グッズ在庫管理・引っ越し手伝い
イベント(ファン感謝祭・サンクスパーティーなど)…会場設営・グッズ販売

(いずれも2017年9月~2019年1月)

これらの活動の中で知り合ったEさんに協力を要請し、インタビュー調査を行った。

2.2 調査対象者の概要

本研究でインタビュー調査となった者の概要を述べる。

Eさんは37歳の女性でボランティア歴は3年である。現在は小学校の児童クラブで働いている。

1回目の調査(2017年12月19日(火)): Eさん(90分)

2回目の調査(2018年11月27日(火)): Eさん(90分)

Eさんに高知工科大学永国寺キャンパスに足を運んでいただき、中川善典先生同席のもとインタビュー内容をすべて録音し、書き起こしを行った。

内容量は文字数にして1回目は21042字、2回目は16212字である。

2.3 分析方法

本研究では荻田(2018)[2]による注目する一つの出来事を複数の物語の延長線上に置き、その出来事の意味を立体的にとらえるライフストーリーの分析手法を用いる。

3 データ収集結果

3.1 内気な性格の克服に関する物語(物語1)

Eさんは今回のインタビューに応じてくれたが直接会って頼まれると断っていたかもしれないと言っていた。今回のイ

インタビュー協力の依頼は LINE を通じて行ったが、今回のように LINE やメールでのお願いであったから協力してくれた。また、ボランティアと一緒に活動している上久からの依頼だったため、知っている人ということもあり前向きに検討できた。

E さんは内気な性格であったが、このような性格であることを E さん自身はマイナスなことだと考えていた。

E さん：今もめっちゃめっちゃ緊張しててここに来るまでもずっと緊張してて昨日の晩からおなか痛くて、いや大丈夫ですけど。

そのような E さんが高知ユナイテッド SC のボランティアに参加するようになったのは 2016 年のことである。友人含めて 3 人で試合観戦していた E さんは球団スタッフの方にボランティアの誘いを受ける。E さんは「暇やし…」「(3 人と)一緒なら…」と軽い気持ちで承諾する。しかし、E さん自身人見知りということもあり選手と近い関係で接しながらという状況が分かっていたら断っていた。軽い気持ちで始めたボランティアだったが予想よりも選手やスタッフたちと話す機会も多くはじめは苦戦した。

また、ボランティアを始めた当初はボランティア自体が出来たばかりで何をすればいいのか、どうすれば効率よく作業をこなせるのか球団側も含めて誰もわからない状況だった。

E さん：結構自分が人見知りだったりするので、恥ずかしがり屋なんでそういうのダメなんです。出来れば選手とかと関わらなくてもいいような、初めはグッズ販売って聞いていたので、だったら選手と関わらんかなと思って始めたら結構選手がぐいぐい来てくれて。

しかし、ボランティアを続けるうちに選手やスタッフが積極的に声をかける環境に慣れ、E さん自身も積極的に行動できるようになった。また、球団との距離も近かったため、お互い笑いながら楽しく活動できていた。ボランティアの雰囲気アットホームだったからこそやり方を模索しながらでも楽しくボランティアを続けることができ、自分の意見も率先して言えるようになった。

E さん：なんかその球団っていうかユナイテッドの、球団の人たちとかスタッフの人たちも気軽に話ができるような人達だったので、なんかすごいかしこまって行かにならなくて感じじゃなかったの。

E さん：まあやり始めた頃よりかはなんか自分からもっと進んでやるようにじゃないですけど、なんかもっと関わりたいというか、チームに関わりたいとかもっとやれるんじゃないかとかみたいな気持ちはだいぶ大きいと思いますね。

ボランティアを始めた当初は若干消極的な姿勢が見られた E さんだったが、ボランティア活動を通じて今ではもっと積極的に球団に関わりたいと感じるようになっていた。こうして内気な性格を克服しつつある自身のことを E さんはプラスな変化であると捉えている。

3.2 母と娘の物語 (物語 2)

E さんには現在高校 1 年生の娘さんがいる。E さんは娘さんによく「人が嫌がってやらんことは積極的にやってマイナスはない」と教えてきた。

娘さんが中学 1 年生の時の学校の面談で娘さんが学校では生徒会に関わるなど自分から率先して動いていることを初めて知る。家ではそのようなことを感じたことがなかったことに加えて、E さん自身は学生時代に積極的に動くことが出来なかったため娘さんの行動に驚いた。

E さん：そんなん普通やして言うけどそれを普通で捉えることが私とは違うなって。誰かやってくれるやろみたいな感じが私には昔はあったけど、じゃなくて自分が率先して動くってすごいなって。

E さんの言葉に感化されて人が嫌がることでも積極的に取り組む娘さんのことを E さんは感心していた。その娘の姿に皿に感化されて E さん自身も更なる積極的な行動を心掛けるようになった。

そしてボランティアに参加している E さんの話を聞いて興味を持った娘さんも高知ユナイテッド SC のボランティアに

参加することになる。

そんな娘さんが高校1年生の時、Eさんは高知ユニテッドSCでのボランティア活動を記録しているプリントを娘さんの部屋で発見する。そのプリントは学校に提出する課外活動の報告書のようなものであった。そのプリントにはボランティア活動の細かい活動内容だけではなく、グッズ販売に関する娘さんの考え、今後は母の指示を受けて動くだけではなく自分から率先して行動していきたいという目標などが記入欄にびっしり書かれていた。

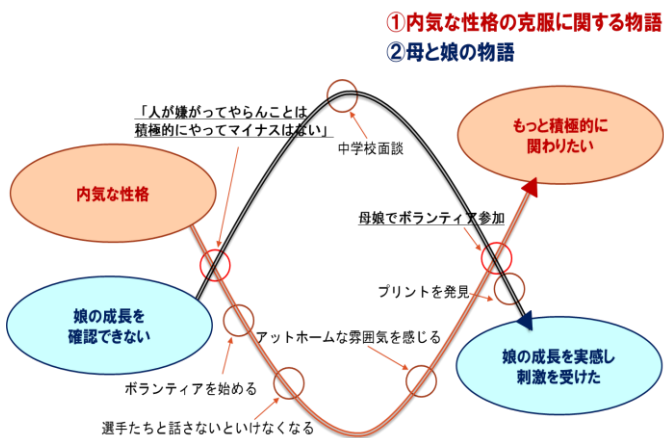
人数が少なくアットホームな雰囲気ボランティアだったからこそ高校生である娘さんでも介入する機会があり、向上心を持って活動することが出来た。そして、人数が少ないからこそEさんは自ら娘さんにとっての見本になる必要があった。

Eさん：こんなこと書けるようになったんやみたい。そういう風に考えちよるんやって、娘はって。(中略)自分なりに本人なりにいろいろ考えてボランティアしよったんだなって。

アットホームな雰囲気だったからこそ娘さんが自分なりの考えを持ってボランティアに取り組むことができ、そのことを知ったEさんは3年ぶりに娘さんの成長を感じることができた。そのような娘さんの姿にEさんは刺激を受けていた。

4 統合的分析

2つの物語での出来事を図式化したグラフを記載する。



図：2つの物語の要素となっている出来事を図式化したもの

本研究ではEさんにとってボランティアとはどのような意味をなすのか明らかにすることを目的としていた。人生の中の出来事の意味はそれ単独では決まらず、比較するものがある初めて定まる。そのため本研究では母娘でボランティアに参加するという出来事を物語1と物語2の延長線上に置き、図式化した先程の図を作成した。この図をもとに2つの物語それぞれでボランティア活動とはどのような意味を持っていたのかを分析する。

物語1では内気な性格であったEさんは娘さんに「人が嫌がってやらんことは積極的にやってマイナスはない」と教え続けていた。そして、ボランティアを始め、初めは選手と話さないといけない状況に戸惑いつつもアットホームなボランティアの雰囲気に慣れ、娘さんとも一緒にボランティアに参加するようになった。その結果、Eさんは最終的にはもっとボランティアに積極的に関わりたいと考えるようになった。Eさんはアットホームな雰囲気ボランティアの中で内気な性格を克服しつつあることから物語1ではボランティア活動とは「内気な性格を克服するきっかけ」という意味を持つと言える。

また、物語2では娘の成長を実感できていなかったEさんは娘さんに「人が嫌がってやらんことは積極的にやってマイナスはない」と教え続けた結果、娘さんの中学校の面談で積極的に動いていることを知った。その後、一緒にボランティアに参加したのち、ボランティアについてのプリントを発見し、3年ぶりに娘の成長を実感することができた。そして、Eさん自身も娘さんの姿に刺激を受けた。ボランティアについてのプリントがきっかけでEさんは娘さんが自分なりの考えを持ってボランティア活動に取り組んでいることがわかったことから物語2ではボランティア活動とは「娘の成長を実感する機会」という意味を持つと言える。

結論

2つの物語を踏まえるとEさんにとってボランティア活動とは「成長した娘に対して立派な母であるために内気な性格を克服するための場」とであると言える。

このことは、Eさんのようにもともと内気な性格の人や、娘さんがいる人に限って成立する。しかし、他の人にも当て

はまるように一般化することも可能である。つまりボランティア活動を続けている人にとって自発性が高まる物語に加え、それとお互いに相乗効果が発生するような物語が存在しているという仮説を得ることが出来る。

このことは既存研究である大沼(2017)[1]を踏まえると意外な結論であるかもしれないが小規模な地域球団でアットホームな雰囲気である高知ユナイテッド SC でのボランティアだからこそ成り立っていることが分かる。

参考文献

[1]大沼 義彦, 山口 泰雄, 武隈 晃, 高橋 伸次, 時本 識資, 杉山 重利 (2017) 第 51 回日本体育学会大会号 P.146「スポーツイベントボランティアの参加意識と評価」

[2]荻田英樹 (2018)「地域球団ボランティアに携わる意味に関するライフストーリー研究」